

令和元年6月21日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02533

研究課題名(和文) ラシーヌと新旧論争

研究課題名(英文) Racine and the Quarrel of the Ancients and the Moderns

研究代表者

永盛 克也 (Nagamori, Katsuya)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：10324716

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：17世紀におけるフランス古典主義の形成過程に「新旧論争」の影響をみる視点に立ち、「古代派」としてのラシーヌの立場を「近代派」の主張とつきあわせる形で検証し、「新旧論争」の文脈の中でラシーヌが古典的文献とその註解を典拠として忠実にふまえながらきわめて意識的に宗教悲劇『エステル』の創作を行っていること、そこでは神学問題に関わる文献学的知見と古代のギリシア悲劇に倣った劇作法が見事に総合されていることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フランス17世紀末の「新旧論争」において、ラシーヌは16世紀以来の人文主義の精神(翻訳と注解という作業により文献の正確な理解を目指すこと)を踏まえ、創作の典拠とする古代の文献を最大限に尊重することにより「古代派」としての立場を明確に示すと同時に、洗練された「近代」フランス語による創作を实践することにより、「古代派」と「近代派」の対立をいわば止揚し、フランス古典主義の新たな規範となったことを検証した。

研究成果の概要(英文)：From the standpoint that views an influence of the the Quarrel of the Ancients and the Moderns in the formation of the 17th-century french classicism, we examined Racine's positions as an "Ancient" by cross-checking arguments made by the "Moderns" and demonstrated the following points：in the context of the Quarrel, Racine created very consciously Esther by interpreting with fidelity ancient texts and their commentaries, so that philological knowledge on theological issues and dramaturgy comparable to that of the Greek tragedy are ingeniously integrated in this christian tragedy.

研究分野：フランス文学

キーワード：新旧論争 ラシーヌ 悲劇 旧約聖書 エステル記

1. 研究開始当初の背景

17世紀末(1687-1694)および18世紀初頭(1713-1715)にフランスで起きた「新旧論争」が文学史上のエピソードのひとつにとどまるのではなく、より広い時間軸において考察されるべき思想史上の課題であることはいうまでもない。問題をフランスに限ったとしても、16世紀の人文主義の精神を出発点とし、18世紀の啓蒙思想へとつながっていく学問と芸術に関わるさまざまな言説は、その時々において争点こそ異なれ、一貫した問題意識の存在を示している。

(1) 新旧論争の歴史 この論争の概略はすでに Hippolyte Rigault (*Histoire de la querelle des anciens et des modernes*, 1856) や Hubert Gillot (*La Querelle des anciens et des modernes en France : de la Défense et illustration de la langue française aux Parallèles des anciens et des modernes*, 1914) によってまとめられているが、近年になって新旧論争に関わる浩瀚な撰文集(イタリアやイギリスの著作を含む)が重要な解説を付される形で出版された(*La Querelle des Anciens et des Modernes, XVIIe-XVIIIe siècles*, précédé de *Les abeilles et les araignées*, essai de Marc Fumaroli, suivi d'une postface de Jean-Robert Armogathe. Édition établie et annotée par Anne-Marie Lecoq, Gallimard, 2001)。Fumaroli による長文の解説「蜜蜂と蜘蛛」は新旧論争がヨーロッパの「文芸共和国」に共通の関心事であったことを強調した上で、古代の遺産を己のものとした上でそこからエッセンスを抽出する思慮深い「古代派」(創造的模倣を旨とする立場)と過去の遺産に囚われることなく、全てを自らのうちから紡ぎ出そうとする傲慢な「近代派」(作者の独創性を主張する立場)の対比を明快に描き出している点で興味深い。

(2) 新旧論争とフランス古典主義 17世紀フランスの文芸界において、古典古代への崇敬を旨とする立場と近代の創意を重視する立場は、批判と反発を相互に繰り返す、常に緊張関係の中にあっただ。このような作品の擁護や自説の正当化の必要から理論化の要求が生じたのであり、「フランス古典主義」の理論は一挙に成立したのではなく、絶えざる論争の中で徐々に形成されていったのだという事実を忘れてはならない。その一方で、17世紀末におけるフランス古典主義の「完成」が必ずしも「古代派」の勝利を意味しない、という逆説についても再度考察してみる必要がある。

(3) 新旧論争とラシーヌ 上に述べた逆説を解き明かす上で、劇作家ラシーヌ(Jean Racine, 1639-1699)と新旧論争の関わりを再検証することは重要だと思われる。なぜなら、ラシーヌこそはポール・ロワイヤルの「小さな学校」できわめてすぐれた人文主義的教育を受けた後、西洋古典の素養を生かして創作した悲劇作品を世に問い、詩人ボワローの盟友として、アカデミー会員として、さらには国王の修史官として、「古代派」の大義を体現した人物だからであり、その一方で、ペローをはじめとする「近代派」によって論敵とみなされつつ、「ルイ大王の世紀」の優越性を例証する大詩人として顕揚される存在でもあったからであり、「古代」を範と仰ぐ悲劇作家の傑作が「近代」の文芸のすぐれた成果として「回収」される、という逆転の構図がここに成立するからである。

2. 研究の目的

フランス古典主義の形成過程に「新旧論争」の影響をみる視点に立ち、「古代派」としてのラシーヌの立場を「近代派」の主張とつきあわせる形で検証し、「新旧論争」がラシーヌに悲劇作家としての自らの特性を自覚させる機会を与えた一方で、古代のモデルに代わる近代の新たな規範となる作品を創作が可能になったことにより、「古代派」と「近代派」の対立が止揚されたことを示す。

3. 研究の方法

(1) 「古代派」としてのラシーヌの一貫した立場を「新旧論争」以前にさかのぼって検証し、書簡や序文を通して、人文主義者としての側面および論争家としての側面を明らかにする。また、『アルセスト』論争におけるラシーヌの態度、およびギリシア悲劇への回帰の戦略的意義について、序文および作品の分析を通して明らかにする。さらに、新旧論争が「比較文学」的視点をもたらし、古代の遺産の地位が相対化される一方、近代の成果が「後世」によって規範的価値として定立されていく流れをラシーヌの例を通して検証する。

(2) 新旧論争関連の撰文集に寄せた Marc Fumaroli の解説(« Les abeilles et les araignées », art.cit.)などに依拠して、とくにルイ 14 世治下の論争の経緯と要点を整理する。17世紀フラン

スにおける古典ギリシア語・ギリシア文学の受容については R. C. Knight による詳細な研究書 (*Racine et la Grèce* [1950], 2e éd., 1974) を参照する。具体的には、ラシーヌの論争的文書(書簡や序文)を当時の文脈の中に置きなおして、自作に向けられた批判に答える際にラシーヌが序文で展開する議論において、古代の作家や作品の権威をいかに援用しているか、という問題を検証する。古代の作品に描かれた登場人物の性格を当世風の趣味に従って書きかえることの是非(『アンドロマック』序文 [1668])、作家は「限られた少数の叡智ある人々」を念頭に創作すべきであり、ホメロスやウェルギリウスなど古代の偉人たちに恥じないよう絶えず自問すべきである、という主張(『ブリタニキウス』序文 [1670]) - これらの「古代派」としての立場表明は多分に詭弁的あるいは術学的要素を含んでいる、とも考えられるが、すでに後年の新旧論争の論点が先取りされている点を確認する。

(3) 古典古代の作品への敬意がラシーヌの文学的立場を決定し、1674 年以降の新旧論争の問題につながっていく過程を検証する。ラシーヌは『イフィジェニー』序文(1675)において、新興ジャンルであるオペラを直接批判することはしないが、『アルセスト』の作者(キノー)およびその擁護者(ペロー)の文献学的素養の欠如を指摘し、「近代派」によるエウリピデス批判が誤った文献解釈に基づくものである、と痛烈な批判を展開する。同様の態度はプルタルコス(1676)の翻訳者アミヨの文体を称賛する『ミトリダート』序文(1676)にもみられることを指摘する。

(4) ラシーヌがマントノン夫人の要請によりサン＝シール女学院の生徒のために創作した『エステル』(1689)について、「古代ギリシア悲劇」への回帰という観点から考察する。また、『エステル』を新旧論争の文脈の中に位置付ける考察を行う。ポール・ロワイヤルにおいてルメートル・ド・サシを中心に進められた聖書の翻訳作業、とくに 1688 年に出版された『エステル記』の翻訳・註解を含む版がラシーヌの創作に与えた影響を検証する。

4. 研究成果

(1) 17 世紀末および 18 世紀前半の「新旧論争」と重なる時期における、劇作家としての、また宮廷人としてのラシーヌに対する同時代人の証言(サン＝シモンやルイ・ラシーヌの『回想録』など)を手掛かりにして、ポール・ロワイヤルの「小さな学校」で身につけた人文主義的教養と同時代の宮廷社会において重視された社交的礼節の精神とを見事に総合した点に劇作家および宮廷人としてのラシーヌの成功の要因があることを論じた。また、新旧論争の文脈において、コルネイユとラシーヌの対比・比較論には「近代派」、「古代派」それぞれの主張が反映されていることを論じた。

(2) 17 世紀の詩学における「認知」の解釈に着目し、ラシーヌに近い立場にあった文献学者ダシエ(古代派)によるアリストテレス『詩学』の翻訳・註解が「新旧論争」の文脈において理解すべきものであることをコルネイユ(近代の創意を重視する立場)批判に即して明らかにした。また、ラシーヌが『アンドロマック』の第 2 序文で古代作品の意匠を変更する必要性を主張するために引用した古代のスコリアは『イフィジェニー』の構想過程で発見したものであり、ラシーヌがオペラという新ジャンルの擁護者たち(近代派)に対し権威的論証に訴えている点を明らかにした。

(3) 1689 年にサンシール女学院で上演されたラシーヌの宗教悲劇『エステル』を新旧論争の文脈の中に位置付ける考察を行った。まず、ポール・ロワイヤルにおいてルメートル・ド・サシを中心に進められた聖書の翻訳作業、とくに 1688 年に出版された『エステル記』の翻訳・註解を含む版がラシーヌにとって宗教悲劇の主題の選択の契機となったのではないかと仮説をたてた。聖書の翻訳は人文主義の伝統を受け継ぐ「古代派」の立場表明とも考えられる実践であり、ラシーヌはこれを尊重する立場から『エステル』の創作に臨んだのだと考えられるのではないかと - この仮説に基づき、『エステル』の詳細なテキスト分析を行った。

『エステル記補遺』はプロテスタントによって外典として退けられたが、トリエント公会議において正典として確認されたものであり、このテキストを劇の重要な典拠とすることは、ナントの勅令廃止(1685 年)により迫害の対象となったプロテスタントとは一線を画す立場を示すことになる。一方、ルメートル・ド・サシ訳『エステル記』(1688 年)では『補遺』の部分において神の摂理が果たす役割の重要性について長い註解が加えられている。特にエステルの前でアシュエリユスの怒りを鎮めるのは「有効な恩寵」であることがアウグスティヌスの著作に依拠して述べられており、イエズス会の主張する「十分な恩寵」説への反論として読むことができる。こうして古代の権威である教父の著作に依拠した聖書註解が、近代の神学者の解釈に対置される構図が成立するのである。

『エステル』の分析の結果、ラシーヌが『エステル記補遺』にあたる「七十人訳聖書（ギリシア語訳聖書）」の追加部分に含まれる要素 - 神の摂理の強調 - を劇の核心部で用いていること、しかもそれはサシの註解で示された解釈に添うものであること、が明らかになった。古典的文献とその註解をふまえ、それに忠実に従う形で創作を行う態度は「古代派」としてのラシーヌの立場を明確に示しているといえる。さらに『エステル』のテキスト分析を進めた結果、ラシーヌの戯曲において、神の摂理を強調する（註解の役割を果たす）言葉は主として合唱隊によって担われていること、つまり、人間の行動のレベルと神の摂理のレベルを区別して提示することが合唱隊の導入によって可能となっていること、古代のギリシア悲劇に倣った合唱隊の導入は形式的模倣や音楽的装飾にとどまるものではなく、劇作法によっても根拠づけられること、が明らかになった。以上のように悲劇『エステル』の創作と上演を同時代の新旧論争および神学論争と関連づけて考察することによって新たな展望を得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

Katsuya Nagamori, « Civilité et honnêteté chez Racine » (『京都大学文学部紀要』第 57 号, 2018 年, p. 183-204.)

永盛克也「17 世紀の詩学における「認知」」(『Stella』第 37 号, 九州大学フランス語学フランス文学研究会発行, 2018 年, p. 113-132.)

Katsuya Nagamori, « Racine devant les tragiques grecs » (Revue *Europe*, décembre 2019, ISSN 0014-2751) (印刷中)

〔学会発表〕(計 3 件)

Katsuya Nagamori, « Le bon usage ou la civilité dans le discours au XVIIe siècle : le cas de Racine » (Colloque international « Transitions au pays de la civilité ? », organisé par le département de langue et littérature française (Université Nationale Centrale de Taiwan) et *Transitions* (Université de la Sorbonne-Nouvelle-Paris III), Université Nationale Centrale de Taiwan, 台湾, 2017 年 11 月 3 日)

Katsuya Nagamori, « La reconnaissance (anagnorisis) dans la poétique du XVIIe siècle » (Conférence à l'Université de Lorraine, フランス, 2018 年 3 月 13 日)

Katsuya Nagamori, « Esther de Racine : le texte et le contexte » (Conférence à l'Université de Lorraine, フランス, 2018 年 3 月 14 日)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。